高齢者におけるソーシャル・サポートの互恵性と抑うつとの関連

○小野口航¹・大井屋奏¹・福川康之²(¹ 早稲田大学大学院文学研究科・² 早稲田大学文学学術院)

キーワード: 互恵性・抑うつ・高齢者

The relationship between social support reciprocity and depressive symptom in older adults

Wataru ONOBUCHI¹, So OIYA, Yasuyuki FUKUKAWA²(¹ Waseda University, ² Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

Key words: Support reciprocity, Depression, Older adults

目的

高齢者においてソーシャル・サポートの互恵性は精神的健康に影響を与えることが示唆されている(Rook,1987). ただし、サポート授受相手との関係によって互恵性を与える影響が異なることが指摘されている(三浦・上里,2006). 本研究では高齢者のソーシャル・サポートの互恵性が抑うつに与える効果について、サポート授受相手との関係を考慮しつつ検討することを目的とする。

方法

- ・調査対象者: 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「[「老研—ミシガン大学全国高齢者パネル調査<Wave2(1990)>」(東京都健康長寿医療センター研究所, ミシガン大学)]」の個票データの提供を受けて二次分析を行った。調査対象は、全国60歳以上の男女である。調査対象者は<1>配偶者との関係:1161(男性697, 女性464)名で平均年齢は67.73(SD:6.16) 歳<2>子や孫との関係:1526名(男性687, 女性839)名で平均年齢は69.18(SD:6.81) 歳<3>その他の人物との関係:1154(男性493, 女性661)名で平均年齢は68.79(SD:6.58)歳であった。
- ・調査内容: 対象者の性と年齢に加えて次の項目を使用した。
 - 1.抑うつ: 抑うつ症状の測定にはCES-D日本語版(島・鹿野・北村・浅井, 1985)を用いた。
 - 2.ソーシャル・サポート: サポートの授受を問う項目としては情緒的サポートの受容と提供を問う項目を二項目ずつ用意し、それぞれの項目に対して配偶者について、子供や孫について、親戚や友人や近所の人について尋ねた。さらに、配偶者や子供や孫といった授受相手がいない対象者と、「わからない」と回答した対象者を分析から除外した。
- ・分析: 互恵性の群分けとしては、受容を問う二項目の合計得点から提供を問う二項目の合計得点を引き、正の値になったものを「過大利得群」、0になったものを「平衡群」、負の値になったものを「過小利得群」とした。年齢については64歳以下、65歳から74歳、75歳以上の人を順に「低群」「中群」「高群」の3群に分けた。サポート相手との関係毎の互恵性が抑うつに与える影響を調べるために、子どもとの関係とその他の人物との関係においては、サポートの互恵性と年齢と配偶者の有無を独立変数、性別を共変量とし、抑うつ得点を従属変数とした三元配置の分散分析を行った。配偶者との関係においてはサポートの互恵性と年齢と性別を独立変数とし、抑うつ得点を従属変数とした三元配置の分散分析を行った。

結果

配偶者との関係における互恵性が抑うつに与える影響: 配偶者との関係における互恵性の主効果が有意となったので多重比較を行ったところ、過小利得群は平衡群よりも有意に抑うつ得点が高かった($p<.05$).

子や孫との関係における互恵性が抑うつに与える影響: 二次の交互作用が有意となったので配偶者有群と配偶者無群に分

けたうえで、それぞれにおいて子どもたちとの互恵性と年齢郡を独立変数とし、性別を共変量とした二元配置の分散分析を行った。配偶者無群において互恵性と年齢の交互作用が有意傾向となったので単純主効果の検討を行ったところ、高群において過小利得群は平衡群と過大利得群よりも有意に抑うつ得点が高く($p<.001$; $p<.01$), 中群において過小利得群は平衡群と過大利得群よりも有意に抑うつ得点が高かった($p<.05$; $p<.05$). また過小利得群において年齢群の高群は中群と低群よりも有意に抑うつ得点が高かった($p<.05$; $p<.05$). 配偶者有群において互恵性の主効果が有意となったので多重比較を行ったところ、過小利得群と過大利得群は、共に平衡群よりも抑うつ得点が高かった($p<.01$; $p<.001$).

その他の人物との関係における互恵性が抑うつに与える影響: その他の人物との関係において互恵性の主効果が有意となったので多重比較を行ったところ、過小利得群と過大利得群は、共に平衡群よりも有意に抑うつ得点が高かった($p<.05$; $p<.05$).

Table1に本研究における結果をまとめたものを示す。

Table1 授受相手との関係別の互恵性と抑うつとの関連			
授受相手との関係と群の特徴	情緒的サポートの互恵性		
	過小利得状態	平衡状態	過大利得状態
その他の人物	+	-	+
配偶者	+	-	-
子ども	+	-	+
配偶者無群			
64歳以下	ns	ns	ns
65歳以上	+	-	-

※「+」は抑うつ傾向が高く、「-」は抑うつ傾向が低いことを表す。nsは有意差なし。

考察

本研究においてサポートの授受相手との関係によって互恵性が抑うつに与える影響は異なることを示唆する結果が見られた。その中でも配偶者との関係や65歳以上の配偶者のいない人物の子供との関係においては、サポートを過大利得状態は過小利得状態と比較すると抑うつにつながりにくいことが示唆された。しかし、先行研究における互恵性の指標化の方法と本研究における互恵性の指標化の方法の違いなどから単純に結果を比較することは難しい。今後は互恵性の指標化の方法をさらに吟味し考慮していく必要があるだろう。

引用文献

- 三浦正江・上里一郎 (2006). 高齢者におけるソーシャルサポート授受と自尊感情,生活充実感の関連 カウンセリング研究,39,40-48
- Rook,K.S. (1987). Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older woman. Journal of Personality and Social Psychology,52,145-154